

# 今治歴史散歩

大成経凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第24回は、<sup>たかばた</sup>高機の考案者で知られる<sup>きくやしんすけ</sup>菊屋新助（1773～1835）の業績を紹介し、彼が生きた江戸後期の伊予綿業界と、伊予<sup>かすり</sup>絁先哲として輝いた近代を歴史散歩したいと思います。

## 第24回 機業家・菊屋新助の足跡を訪ねて

### ●綿替木綿制を支えた高機

わが国で綿花栽培が盛んとなるのは江戸時代以降で、それと連動して人々の日常着が麻から木綿へと大きく変化します。今治地方では、越智郡島方を中心に綿花栽培が盛んとなり、岩城島では恩恵にあずかる人々によって、祥雲寺に<sup>わた</sup>綿地藏が建立されるほどでした。

今治城下では、江戸後期になると有力商人による<sup>わたがえもめんせい</sup>綿替木綿制、<sup>しろもめん</sup>で白木綿の生産が盛んとなります。この生産方式は、綿と織機を農家の女性らに貸し与え、できた木綿と賃金を交換するというものでした。このとき貸し与えた織機を<sup>たかばた</sup>高機、といい、腰掛け作業で従来の地機（脚のない布織機）の2倍以上の高率が生まれ、高度な紋様の織り出しを可能としました。伊予におけるこの考案者こそが菊屋新助でした。

ただ、新助は今治藩領出身ではなく、安永2（1773）年に松山藩領野間郡小部村（今治市波方町小部）の農民・伝九郎の子に生まれます。子孫の菊川琢哉氏によると、庄屋に次ぐ組頭の地位であったようです。商才に長けた新助は、文化年間に松山城下の<sup>まさき</sup>松前町（松山市松前町）へ移住し、木綿商を営むようになります。姓が菊川であったことで、屋号は「菊屋」を称することにしました。

### ●伊予絁の発展に大きく貢献

商売は順調に推移したようで、文化11（1814）年には郷里小部の神社「<sup>すとくいん</sup>崇徳院金毘羅大権現」へ石段を寄付しています。新助が扱った商品は<sup>ゆうき</sup>伊予結城、と呼ばれる<sup>しま</sup>縞木綿で、伊予絁、とも称しました。これは、栃木県結城地方を主産地とする高級綿織物「結城縞」を模したもので、先染めした二色の綿糸を織り上げて縞模様としました。これに対して、今治領特産の木綿は無着色の白木綿でした。新助は、生産性をあげようと織機の改良に取り組みます。京都西陣から絹織物用の<sup>はなばた</sup>花機1台を取り寄せ、改良を重ねて綿織物用の菊屋式高機を考案したのです。

この高機を松山城下本町の高木屋藤吉と連携し、普及さ



伊予絁頌功碑（松山市道後公園）  
※菊屋新助と鍵谷カナの功績を称える

せることで、文政元（1818）年に900反余りだった菊屋取扱いの伊予縞は、同4（1821）年には3,600反余りへと増加します。このうち領外売りが1,500反余りに及び、販路拡大のため京阪・尾張・九州など各地へ出張し、声価を高めて松山領の特産物へと発展させます。藩主松平定通も、国産奨励の立場から保護金を与えて、新助らの事業を支援したようです。



高機を使った製織作業（松山市久万ノ台／伊予かすり会館）

## ●伝説として機業界に生きる

天保6（1835）年、新助は享年63歳で亡くなり、城下木屋町の円福寺に葬られます（墓は県指定記念物）。その遺志は、温泉郡垣生村今出出身（松山市西垣生町）の農婦・鍵谷カナ（1782～1864）が、高機で縞模様の伊予縞を製織することで継承され、これが伊予縞発展の礎となるのです。

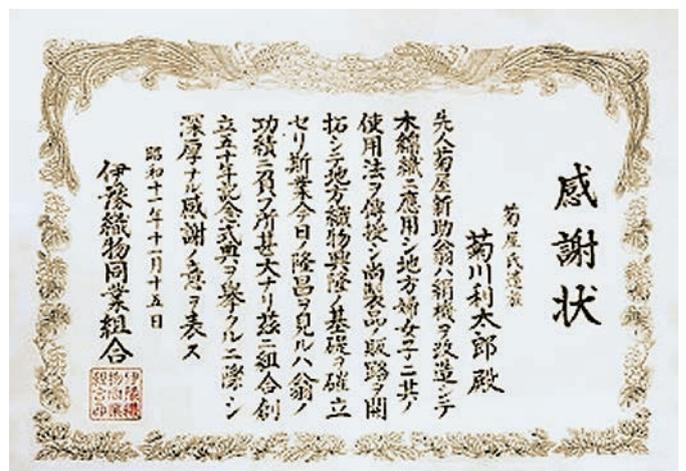
縞は、先染めした綿糸を使うのは縞木綿と同じですが、柄を入れる部分は染める前に（別の糸でくくるなどの）防染の処理を施し、その糸を使って織るため、手間のかかるものでした。しかし、その手間が付加価値を生んで、明治後期から生産量が飛躍的に増え、久留米・備後と並んで「日本三大縞」と称されます。大正12（1923）年には、史上最高の年産270万反を記録しました。

伊予縞の発展にともない、業界はカナと新助をその先哲として顕彰するようになります。明治16（1883）年の関西連合府県共進会と同32（1899）年の第1回愛媛県重要物産共進会で新助は追賞を受け、子孫に賞状と賞金が下賜されました。共進会は、産業振興を図るための展覧会や品評会で、故人に対しても賞が贈られています。また、伊予縞が隆盛をきわめた大正6（1917）年には、伊予織物同業組合が二人を称える「伊予縞創始頌功碑」を建立し、題字は大蔵大臣・勝田主計（松山市出身）が揮毫しています。

伊予縞は戦後に衰退の一途をたどり、昭和55（1980）年に愛媛県の伝統的特産品産業に指定されます。カナの顕彰活動は、今でも松山市内でよく目にしますが、新助のそれは松山・今治両市で見られません。彼は、今治特産の白木綿を支えた功労者でもあるのです。子孫は現在、今治市内で自動車整備工場を営み、今治タオル製の布ナプキンの製造・販売にも取り組むなど、綿業とのかかわりを継承しています。



菊屋新助寄進の石段  
（今治市波方町小部／崇徳院金毘羅大権現）



伊予織物同業組合からの感謝状  
（昭和11年／株キクガワ自動車所蔵）